

1. 評価結果概要表

作成日 2008年12月3日

【評価実施概要】

事業所番号	0372200501		
法人名	社会福祉法人 志和大樹会		
事業所名	グループホーム ゆいっこ		
所在地	〒028-3453 岩手県紫波郡紫波町土館字関沢24番地1 (電話) 019-671-7155		
評価機関名	特定非営利活動法人いわての保健福祉支援研究会		
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号		
訪問調査日	平成20年9月11日	評価確定日	平成20年12月3日

【情報提供票より】(平成20年8月28日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 16 年 5 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	13 人	常勤 12 人, 非常勤 1 人, 常勤換算 7.3 人	

(2) 建物概要

建物構造	木造平屋建て 造り		
	1 階建て	0	1 階 ~ 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	30,000 円	その他の経費(月額)	美容室・オムツ代実費
敷金	有(円)	無	
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1,200 円		

(4) 利用者の概要(8月28日現在)

利用者人数	9 名	男性 1 名	女性 8 名
要介護1	4 名	要介護2	1 名
要介護3	2 名	要介護4	1 名
要介護5	1 名	要支援2	名
年齢	平均 83 歳	最低 73 歳	最高 95 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	志和診療所、しわ歯科
---------	------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

ホームは、田園地帯の山際丘陵地にあり、緑豊かな森と見晴らしの良さに癒される立地環境にある。建物はふんだんに使われた青森ヒバの香りが漂い、廊下やトイレ、浴室等の共用部分も広々とした作りになっている。台所仕事や洗たく、掃除等の生活場面ですできるだけ全ての利用者に「役割」をもってもらうことを重視し、そのための出番づくりにきめ細かな配慮がなされている。事業所の理念は職員にも浸透しており、「あなたが必要です」という職員の関わりがさりげなく行われている。その事業所の姿勢と成果が、利用者の主体性や活きいきと仕事をする場面に明確に見て取れる。職員においても業務分担や研修の在り方など、一人ひとりの役割と意思を大事にしており、仕事を「わかちあう」ことによって主体性を促進する姿勢がうかがえる。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回の外部評価では運営推進会議の内容について参加者同士の話し合いをより促進してほしいとの意見が出され、その進め方については今年度も課題として認識されている。また災害対応では蛍光タスキの活用が前年度検討されていて、今年度実現に結びついている。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	職員一人ひとりが自己評価に取り組み、普段自分たちが行っていることの意味を再認識できる機会となっている。また管理者も職員の意識を把握できるとともに、普段管理職が考えていることも、現場職員にわかちあってもらえる良い機会となっている。事業所の「一人ひとりの役割を大切に」という姿勢は、今回の職員の自己評価においても現れている。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議は、概ね2ヶ月に1回開催し、主に事業所の活動などを報告している。直近の会議では他グループホームの視察見学の報告がされている。参加者との意見交換という点では、事業所側の人数が多いことや、会議的な雰囲気のためか、議題に対する自由な意見が得にくいと感じている。議題を参加者の話しやすいものに設定したり、議題にあわせて様々な人に出席を依頼する、又は外部からの参加者を増やすなど、柔軟な実施方法を期待したい。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	運営に関しての要望といったものはないが、定期的に家族会を実施しており、そのなかで率直なやりとりができています。普段の事業所対応については「話をよく聞いてくれる」「介護計画のわかりやすさ」「行きやすい雰囲気」「職員が活き活きとしている」ということに関して好評が得られている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	近隣とは野菜をもらったり、日々挨拶をしあう日常的な支援ができています。それ以外にも学校や公民館など、機会を得ながら利用者や職員が足を運ぶようになっている。しかし認知症高齢者に対する地域の理解は今後期待する部分も多く、地域との向き合い方に難しさも感じている。運営推進会議のテーマにバリエーションを持たせることで幅広く地域住民に関わりをもってもらったり、利用者とスーパーで買い物をするなど日々の接点を大事することなどから事業所と地域が互いに学びあっていくことが期待される。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	事業所の名称「ゆいっこ」の「お互い様」を理念とし、その実践を「役割のある生活」としてケアを行っている。「役割のある生活」と役割のわかちあいは職員はもちろん、利用者も一緒に実践している。		
	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念を具体化するものとして①部署会議で皆で分担を決める。担当者が案を出し、決定は皆の意見で決める。②利用者9人の分担は朝話し合っている。また利用者間で仕事の取り合いなどによる不測の事態が起きないよう、職員はきめ細かに心配りをしている。	○	「役割のある生活」や「お互い様」といった理念は、わかりやすく日々の実践に反映されている。今後も利用者、職員全員による理念の共有に期待する。
2. 地域との支えあい					
	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	ホームは、地域の一員として利用者や職員が公民館活動や、小学校、保育園の行事に積極的に参加している。しかし、地域密着型として地域に根付き、交流などを図るなかでは、地域の方々に対し認知症の方を特別視する心のバリアの除去が必要と考え対応しているが、その具体的な取り組みに難しさを感じている。	○	利用者が、地域のスーパーなどに出かけるなど、日常的な場面で地域の方々の理解が徐々に得られており、また、地域の自治会や老人クラブへの加入を検討しており、グループホームは、「施設」ではなく、いわゆる在宅として一軒の家として通常の「家庭」と同じ雰囲気の中で地域の一員として営んでいることの理解が得られるよう、引き続きの取り組みに期待したい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は新人、経験者関係なく皆で取り組んでいる。自分が日ごろ実施していることの点検、確認として活用しているほか、職員間でも外部からの視点や意見を積極的に得ていきたいという声もでている。		
	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催し、利用者の現状や事業所の行事について報告をしている。しかし会議の参加者として事業所側の人数がやや多く、取り上げる内容も事業所の報告が主であるなど、家族や第三者の意見・提言が少ないことから、今後の課題としている。	○	運営推進会議の進め方として家族や第三者の発言に比重をおき、例えば、自己評価や外部評価などを取り上げたり、議題を参加者から提案してもらうなど、外部からの視点や委員、家族を主体とした活発な話し合いに、今後を期待する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	管理者が町主催の認知症サポーター養成講座の講師を勤めるなど相互連携が図れている。町行事のウォーキング大会にも積極的に参加している。また行政や他事業所と一緒に地域の高齢者支援ネットワークづくりを進めており、これが「認知症なんでも相談所」の実現に結びついている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	利用者の暮らし、健康状態、金銭管理、職員の異動については、毎月ケース記録や金銭出納帳として送付している。また半数程度の家族はほぼ毎月面会の機会があり、そのとき利用者の体調面や行事での様子などを伝えている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	行事(ビアガーデン、忘年会)などと合わせて家族会を開催し、これらを通じて家族の不満や苦情など、様々な意見を聞いている。またその機会を捉え、家族から本人の昔の暮らしぶりを聞き、利用者の理解に繋げており、これをセンター方式の活用とあわせて積極的にケアに活かしていきたいとしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	これまで数人の異動があったが、利用者の動揺を少なくするため、馴染み関係のある職員の異動は行わないなど配慮している。なお、退職者があったときには利用者と一緒に送別会を開き、利用者ともきちんとお別れの場面を持つようになっている。また職員間の連携においても「お互い様」を合言葉として、一人ひとりが過度の負担を抱えないようチームワークづくりに心掛けている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	グループホーム協会などの研修会に参加するほか、他のグループホーム見学も積極的に行っている。研修参加は、概ね一人につき年三回程度で、全職員が公平になるよう配慮している。なお、職員が月間目標(ケアプラン、自己評価、居室美化など)を設定し、毎月職員が重視して取り組む内容を焦点化している。	○	「役割」を重視するという理念は職員育成にも反映しており、職員一人ひとりの主体性を活かしたいとの思いが感じられる。家族からも職員の働く表情に好評が得られており、今後も職員が生き生きと働けるための視点は大事にしていきたい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	盛岡第一ブロックの同業者と交流、交換研修、親睦会を行っているほか、それらの機会には管理者だけでなく現場職員も参加するようにし、ネットワークづくりを行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居前に見学に来ていただいたり、一緒にお茶を飲んだりして、グループホームの雰囲気に溶け込んでもらうようにしている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜ぶ哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	日常的に家事や昔の習わしについて教えてもらうほか、畑仕事や食事の準備、洗濯など日々の仕事は利用者主導で行うことが多い。家事仕事をするに、職員がさりげなく関わることによって、徐々に日々の行動や役割に徐々に馴染んでいる。	○	利用者の役割を重視した事業所の姿勢は、訪問当日においても利用者による食事の後片付けをする場面でも、生き生きとしている印象が感じとれた。職員は利用者の役割のために、取替えてなどの仕事を「溜める」という配慮もされている。今後も利用者が生き生きとした日々が送れるよう様々な配慮を継続してもらいたい。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の意向把握は、センター方式を導入し職員全員で取り組んでいる。利用者の生活状況は家族から聞いているが、利用者の思いや意向等について、より幅広く聞いて利用者の意向の実現に努めたいとしている。センター方式によって得た情報について、どの部分を計画に活かしていくか個々の職員の判断では難しさがあるとのことであるが、本人の意欲につながる部分をマークし計画に活かしている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	センター方式で把握した情報の中から計画に活かすものは、利用者の生活面における「意欲が出る要素」に焦点をあてている。具体的な計画でも、日々の生活において利用者が大事にしている活動内容を把握しており、それをもとに職員の関わりにより、利用者の毎日の「役割」や「出番」につなげている。	○	介護計画には、身体動作や健康面の配慮等が記載されている中で、利用者の楽しみや役割に関する記載を第一に扱われており、日々の生活における利用者の個性が見えやすいものとなっている。今後も是非利用者の日々の意欲を大事にした計画作りを期待したい。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	利用者が入居してから日数が経過すると、職員のかかわり方も慣れから惰性になりがちということで、ちょっとした変化にも話し合いをもち、計画に反映できるよう心がけている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	利用者の希望により遠方の故郷に外出するなど、柔軟な対応を行っている。また開設から3年が経過する中で、共用型の通所サービスも検討してきたが、まだ実現に至っていない。なお、地域の同業者や行政との連携の下で「認知症なんでも相談所」を行っているが、地域の認知症理解への貢献が今後期待される。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	志和診療所を協力医として、法人の看護師とも連携をとりながら、協力体制が確立している。内科については協力医に毎週往診をしてもらい、他科は町内であれば職員が付き添って通院するようにしている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	利用者や家族から終末期もこのグループホームでという要望がある。重度化に際しては家族と事業所が相談をし、同意書をとった上で対応している。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	プライバシーへの対応はマニュアルなどの整備を行っているとともに、利用者への普段のかかわり方や夜間時の対応等について利用者ごとに特徴や留意すべき内容を明記し、職員によって対応に差が生じないようにしている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	家族会や面会の時などを利用して、家族から生活歴等をよく聞き、利用者の日々の過ごし方に活かすようにしている。職員は利用者が「素」を出せる環境づくりに配慮しているが、時にはそれぞれの個性がぶつかる場面があるものの、日々の役割を分かち合う中で、「あなたが必要です」という思いが伝わるよう接している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食べる楽しみはもちろんのこと、調理する楽しみを利用者それぞれが分担して食事の準備をしている。また後片付けも利用者が主体的に手際よく行っていた。なお、夏には野外の軒下で流しそうめんを食べるなど、季節に応じた食事の場面づくりも行っている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴日や、入浴時間は、特に決めていない。利用者の希望に合わせた入浴にしており、夜に入る利用者や、仲のいい人同士で入る利用者もいる。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	理念として掲げている「役割のある生活」を日々のケアの基本としているので、1日の流れにおける利用者一人ひとりの役割を朝に職員間で申し合わせ、利用者ごとに必ず「出番」があるように配慮している。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	「本家」と呼ぶ隣接の特養ホームに行き、仏壇を拝んだり、周辺を散歩したり、近くの農家の畑に行ったり、その日を職員と一緒に楽しく過ごしている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関や居室に鍵はかけていない。利用者が一人で外に出るときは、ある程度の距離までは見守りをし、さらにホームから離れる場合は職員が付き添うようにしている。利用者の外出に関しては近隣の住民も気にかけてみている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	6月に火災の避難訓練を実施した。事業所独自としては、利用者に反射材を利用したタスキを着用させることにしている。何度かの実施を重ねるなかで避難時間を短縮するようにしている。認知症の利用者の避難は、職員がどう動くかという手順(マニュアル)をしっかりと身につける以外にないと考えている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量の確認表をつくり、管理栄養士にみてもらい、淡色野菜(キュウリ、ねぎなど)も取り入れたら等のアドバイスを得ているほか、利用者の摂取量の確認をしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物の外周は明るく、窓を開ければ田んぼが広がり遠くに山が望まれる。台所や食堂も明るく、トイレは空調、照明ともセンサー付きで清潔感にあふれ気持ちがいい。ダイニングには長テーブルがおかれ、何人かの利用者がお茶を飲みながらゆっくりとくつろいでいた。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	寝具類は利用者が使っていたものを持ってきているほか、家族との写真や、好きな本などが置かれ、利用者が一人の時間を楽しんでいる様子がうかがえた。		